
唄は途切れずに

みうらあかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唄は途切れずに

【Nコード】

N0074C

【作者名】

みつらあかね

【あらすじ】

ある日、村が壊された。ラーネが山脈に春苺を採りに行った時。ラーネも胸に銃を放たれ、負傷していた。辛うじて村に帰ったら、村が無残な姿となって待っていた。理由は、「友達」のテイラからもらった紙切れに書いてあり、この村は「研究所の大失敗作の口ポット」の集まる村であったのだ。そしてラーネは重大な決心をし、崩壊した村から出て行く事を決め、そして旅へ出た。旅の途中、ある小さな少年に会い、色々な人達に会い、そして、終焉へと向かう

永遠の唄

一度壊れたこの惑星^{わくせい}に
一度壊れたこの希望に
一度壊れた全ての物に

今願うは何もない。

平和を願うはただ一人。

唄は途切れずに永遠とも言えよう長い時の間
歌われ続けてきた。

唄が途切れる時 世界は終わる。

全てが終わる。 永遠も途切れる。

だから途切れずに唄い続けるだけ

惑星が壊れたとしても
希望が壊れたとしても
全てが壊れたとしても

永遠に唄い続ける

今願うは何もない。

平和を願うはただ一人

自分一人 たった一人でも

全てが壊れたとしても

唄は終わらない。

全ては終わらない。

唄が途切れる時まで。

第一話 教会のある村

聖歌が始まった。ラーネはぼううつとしていて、始まったのに驚き、慌てて覚えている所だけを歌い始めた。

此処は教会がたった一つある村。小さな村で、村人も少ない事で、神官も五人くらいしかいない。ラーネは週に五度くらい早朝に教会へ行き、聖歌を歌う事になっている。勿論ある黒髪で薄いアイスブルの瞳の“友達”の所為で。

ラーネは信者ではなかった。むしろ、神なんていない、と考える方であった。世界にはそういう人が何人もいて、神なんていないという事を主張する堂々とした集いまでもある。そういう集いはすぐに教会によって解散させられる羽目となり、それに参加した者達はブタ箱行きとなる。

「この惑星は神のくれた物―」

ラーネの列はソプラノの列なのだが、思いつ切り低い声で歌う。隣で“友達”が苦笑いしながらも歌っている。勿論神官が此方をもの凄い形相で睨んでいるのは無視として。機嫌が良い時は勝ち誇ったような笑顔で睨み返すが、今日は得に寝起きが悪かったので無視した。全く、今日は寝相が悪くて寝癖もついて……。此処に来る前に急いで髪を川の水で洗って整えてから来たので、遅刻し、神官に怒られ更に機嫌が悪くなったのだった。

聖歌が終わり、他の人達が解散し始めたのでラーネも“友達”に連れられて解散した。

「ねえラーネ、今日は機嫌が悪いの？」

彼女が唐突に訊いてきた。ラーネは勿論機嫌が悪かったので少し冷たく、「……テイラ、機嫌が悪いの、そつとしておいて」と呟いた。テイラは口を尖らせて少し口の中でモゴモゴと嘆いたが、諦めたのかつまらなさそうに項垂れて頷いた。全く、なんで彼女は心が読み取れるのだろう。

外に出ると太陽はすっかり空にあがっていて、光が眩しかった。思わず自分の燃えるような赤い瞳を細める。目の前には草原が広がっていて、その前方には何も見えないほどに草原は広がった。草原には綺麗な花や鮮やかな緑の草がはえていて、とても綺麗であった。子供の頃は此処でよく遊んだもので、今もたまに遊んでいる。此処の花で冠を作ったりネックレスを作ったりして遊んだ。

「じゃあね」

ティラは控えめな微笑を顔にたたえ、手を振った。ラーネもつられて微笑し、手を振り返した。「……じゃあね」と口の中で呟きながら。

雨が降ってきた。それを幸に思うか不幸に思うのかは人の勝手だが、自分なりには幸である。農家の人も幸だろう。ラーネは雨が好きで、此処にはあまり雨が降らない。だからほとんどの人が幸に思うだろう。

「これも神のお恵みだ！」

誰かが嬉しそうに叫んだ。それがなんだか嫌だった。何故全て神絡みなのか、何故全て神のお恵みだというのだろうか。

では神様、あなたがいるのなら、何故人は死んだり傷ついたりするのですか？

神が何だか憎く思えてくるような気がする。自分自身で思考を打ち消した。駄目だ、とまらなくなってきた。しまう。

「ラーネえ、草原行こう！」

外から不意にティラの能天気な声が聞こえた。「良いよー」気分は直ったのでそう答えた。思いつ切り木造の玄関扉を全開にし、そ

のまま走ってテイラの元へ行く。雨はただの小雨で、何だか水浴びをしているようで気持ちよかった。

草原へ行った。草原の草花は滴がついていて、いつもより増して綺麗になっていた。「何するの?」

「冠とか」

「へえ」と適当に相槌を打って話を促す。「何の冠?集めるよ」そう訊くとテイラは少し考え、「スラームと、ラーヴェルかな」と呟いた。スラームは綺麗な黄色と白の花で、ラーヴェルはツルのある長い草である。

「じゃあ探してくるね」

ラーネの視線はくるくる回ったりしながらのまま、そう言い、草原をうろちよろし始めた。

辺りを一端見回すと、黄色い花びらの影が草から覗いていた。早速スラームをゲット!と思い近づいて花を見てみると、ユラームという黄色と黒の花であった。溜め息をついてまた探し始める。

探し始めてしばらくたった頃、手中にはスラームが五本、ラーヴェルが七本くらいあった。材料は十分集まったので、早速冠作りに入った。

「うわ、ラーヴェルが絡まる!」

「そこ切った方がよいよ」

ラーネが作業を初めて十秒後、ラーヴェルの先が絡まった。ラーネが途惑っているので仕方なくテイラが手を伸ばし、絡まった所を切り、その先の作業を始めた。「あ、ちよつと」言い掛けたがラーネはそこで口をつぐみ、その作業をじっと見た。器用にラーヴェルで丸形を作っていく、そして冠の土台が出来上がった。これにスラームを飾っていくのだ。

「此処からなら出来るでしょ」

テイラが偉そうに胸を張って土台をラーネに押し付けて地面に置いていた自分の冠の材料を掻き集め、土台を作っていく。ラーネは微笑して、「ありがとう」と小さな声で言った。テイラは土台を

作るのに夢中らしく、今の言葉を聞いていなかったようだ。自分も気を取り直してスラームを土台に丁寧に飾っていく。ティラの事をちらりと盗み見ると、ティラはもう土台を作り終えて、スラームを飾っていくという最終段階に入っていた。

「出来たー」

最後の自分用のスラームを飾り終え、ラーネは溜め息と共に脱力したように微笑いながらティラの方を見るとティラは悪戦苦闘中でスラームを少し飾った土台と睨み合いをしていた。ティラには決断力がないに近いので、いつもこういうときは遅くなる。

しばらくたって、「完成ー」とティラが額に滲み出た汗を拭きながら満足したような顔で言った。冠はというと、全く駄目だった。良く考えるとティラは手が器用なのだが、センスがなかったのだ。

「どう、これ」

ティラは笑いながら冠を頭にさせてみせた。ラーネはあくまでもお世辞で「似合うよ」と笑ってみせた。「そうでしょお？」と彼女は浮かれて言った。こうなると彼女は止められない。

今日、一人で旅行に行く。

そう決めたのはあまりにも唐突過ぎたかもしれないと考えた。だがそう考えたのは列車の中だったので、もう遅い。

何故自分一人で旅行に行くのかというと、祖母に言われたからである。「もう年長なのだから、一人旅行でもしにいきなさい！」と軽く背中を叩かれながら言われたので、逆らう事も出来ず、渋々一人旅行する羽目になってしまった。行き場所は“雪の丘”という此処から半日で行けるといふ近い場所であり、毎日毎日雪が降っている丘があるらしく、そんな名前らしい。そして自分も雪を見たことがないので、ずっと前から行きたかった場所である。

だが、列車の中はつまらなかつた。一人で、話し相手もいなくて、ただ列車の窓からただの荒野を見ているだけ。というのは詰まらない。することがないので余計にむずむずしたりしてきて、外の空気を吸おうと列車の窓を開けた。列車はとても速いスピードで走っている、外かはどうと強風が入ってきて、周りの人から怪訝な視線を浴び、赤面になりながら慌てて窓を閉めた。

といったって、することがない、とまた考え始めた。ティラを内緒で連れてくれば良かった。だが、直ぐばれてしまうからどうせカンカンと祖母は怒って説教するだろう。全く、一体どうすれば良いのだけ。そう思った時、すぐ横の通路に人影が現れ、その人影を見た。「あ、切符……」通路には車掌が腰を低く屈めて若干笑っているような顔で此方を見た。慌ててポケットから少しよれた切符を取り出し、車掌に見せた。車掌は今「本当に」笑い、前の座席へと歩いていった。身を乗り出し、車掌を目で追ってみる。座席に座っている人達は皆切符を見せ、車掌はまた一つ前の座席へと歩いていき、「連結器有り」という文字の書いてある張り紙のある扉を開けて、出て行った。

「ふうん……」

ラーネは扉に少し興味を持ち、座席を立ってその扉の前まで行き、ノブを回して扉を開けてみると、そこは外で、連結器があつた。扉を閉めるとガゴン、という重い音がした。

困いから身を乗り出して前方を見ると、“雪の丘”が見え始めてきていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074c/>

唄は途切れずに

2010年12月16日22時32分発行